



在学中の2019年12月に吉本新喜劇の「金の卵オーディション」を受け合格。「金の卵11個目」として入門。吉本新喜劇の舞台にて活躍中。

吉本興業株式会社
吉本新喜劇所属

咲方 響(本名:坂田 響)

メディア芸術学科 身体表現コース
2020年3月卒業(18AJ042)

【吉本新喜劇でのお仕事について】

短期大学の卒業を前に、役者をやろうと決めていましたがどんな分野で演じるかは決めていませんでした。沢山オーディションを受けることになるのだろうなと思い、ならば小さい頃から好きだった吉本新喜劇の新人オーディションから受けてみようと思いつき、日頃からチェックをしていたこともあり、受けてみたところ、幸運にも合格をいただきました。毎回の舞台はとても楽しいですが、今演じる中で難しいのは「関西弁」です。島根県の出身なので言葉のイントネーションが違い苦労しています。難しいイントネーションの時は新喜劇の先輩に電話をして「これを話してください」とお願いし、耳で覚えるようにしています。

【メディア芸術学科への入学のきっかけ】

大学に進学を決めるまでは何をやりたいかは漠然としていました。でも、やるなら好きなことにチャレンジしてみようと思いつき、興味のある演じることを学ぶ大学を探しました。出身の島根から一番近くにあったのが大阪芸術大学短期大学部でした。もちろん大阪芸術大学も視野に入れて考えました。芸大は学科やコースが沢山あって魅力的でしたが、一つのことを突き詰めるよりも「演じる」を多く学べる芸短の方が自分にあっていて、芸短へ進学を決めました。また2年後芸大への編入も可能だし、役者が合わなかったときは2年ならばやり直しが効くしなと言う気持ちもありました。

【在学当時の思い出】

メディア芸術学科身体表現コースでの2年間は演技に、歌に、ミュージカルにと多くのことが学べました。在学中は卒業公演をはじめとする3～4作品の舞台に関わらせていただき実践が積めました。また、芸短は学外の舞台も参加を認めてくださるので外部の舞台に出演させていただき、ミュージカルも経験できました。ほぼ毎日舞台に関わっていたなというのが思い出です。それに学友会で副会長も務めていたので、芸短祭などのイベントなどにも関わり、2年間「授業」→「舞台」→「イベント」と、とても忙しかったです。でも「ぎゅっ」と詰まっている感じがとても楽しかったですし、2年間だからこそ出来たんだろうと思います。良い思い出です。

2年間の学びでは沢山の先生にお世話になりました。一番印象に残っているのは「さとうしろう先生」です。身体

表現コースはさとうしろう先生から指導を受ける時間が多く、振り返ると先生から教えて頂いたことが、今役者としての自分の中に結構残っているなと思います。先生は「卒業公演」の演出もしてくださるのですが、作品は歴史系が多く、演技だけでなく和装の衣装を自分で着付けることも学びました。おかげで着物や袴を自分で着れるようになりました。今は吉本新喜劇でお姉さんたちの着付けを手伝うのに役立っています。先生との授業は舞台以外のことも沢山学ぶことができたと思います。



【これからの夢や目標】

吉本新喜劇に入る前は入ってみて違のかなと思えば映像演技の方に進むことも考えていました。でも吉本新喜劇はとても楽しくて、舞台から沢山の人の笑顔がとても近くに見えて、私自身が元気をもらえる場所だなと思っています。出演の機会も頂けるようになってきたので皆さんに私を知って貰えるようになることが今の目標です。また出身の島根では吉本新喜劇のテレビ放送がされていないので、島根県で放送されることも今一番近い夢です。これから私が何をできるかわかりませんが吉本新喜劇を観たいと言うお客様を増やして、全国や世界中で観て頂く世の中を作ることができればいいなと思っています。卒業してからも私を知らない在学生に先生や後輩が話してくださり、私を知ってくれている方がいるのが嬉しいです。頑張れば頑張るほど私のことを知ってくださる人も増えるので、その中で「芸短卒業です!」と言い、大阪芸術大学短期大学部、吉本新喜劇に入ってください方を増やしていきます。

【インタビュー後記】

コロナ禍ということで、オンラインでインタビューを行いました。

パソコンの向こうの咲方さんは礼儀正しく凛とした、でもまだまだあどけなさの残るチャーミングな女性でした。凛とした姿は、さすが縦の厳しい身体表現コースの卒業生と言うのが最初の感想でした。短い時間でのお話でしたが、彼女の言葉からは、所属されている吉本新喜劇で演じることを今とても楽しんでいる様子が溢れでていました。後日、テレビ放映にてご出演されているのを拝見しました。ブラックのパンツスーツでの秘書役! インタビューで拝見した姿とはまた違う大人の女性を演じておられました。今度は劇場へ足を運んでみたいと思います。

インタビュー・文責／企画広報委員 楓井 由美